「よく生きるための80の話」という本を読んで

開倫塾
塾長　林　明夫

おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。先週の台風 23 号と新潟中越地震で、大変な思いをなさった方がいらっしゃると思います。心からお見舞い申し上げます。私の知り合いで学習塾を経営している先生が、京都の舞鶴市と新潟県の長岡市にいらっしゃいます。ので、非常に心配しておりました。皆さん元気だということで、よかったと思います。

できれば栃木県でも、台風 23 号規模の台風にいくつか直撃された場合はどうするか、震度６強あるいは７ぐらいの直下型地震が発生したときにはどうするかという対策を、各市町村ごとに講じておくのも大事なことだと思います。市町村の中心的な地位におられる方にはそのようなことをお考え頂き、市民の方もどのようにしたらよいかを自分で考えることも大事だと思います。

渡辺毅先生が、道徳の教科書をお書きになりました。「よく生きるための 80 の話」という本ですが、私はそれを読んで感銘を受けましたので、ご紹介させて頂きます。PHP 研究所から出ていて、とても勉強になります。

最初の第１章のところに、吉田松陰の話が書いてあります。学生の本業は勉強です。何のために勉強しているのかというと、入学試験に合格するため、就職するため、あるいは資格や技能を身に付けるためなど、様々な目的のために一所懸命勉強することは大切であります。ところが、学校に行くことも就職することも絶望的な状況だったにもにもかかわらず、それでもなお熱心に勉強してその大切さを教え続けた人がいました。その人の名前を、吉田松陰といいます。この吉田松陰について、渡辺毅先生は次のようなことをおっしゃっています。

吉田松陰は、幕末の期に迫り来る外国の情勢や武力を知ろうと考えて、伊豆下田から当時我が国に来航していたペリーの黒船に乗ってアメリカに渡ろうと計画しました。しかし、皆さんもご承知かと思いますが、その計画は失敗してしい、牢獄に入れられてしまいます。当時の国の掟では、外国に行くのは重い罪になったからです。松陰が入った牢獄には、10 数年、ひどい場合には 40 年以上も投獄されている罪人たちがいました。一番の年長者は 76 歳、若くても 43 歳に近い人たちで、皆一様に社会復帰はほとんど絶望だと考えている人たちばかりでした。その牢獄の中には、何とも言えない暗さが漂っていました。

そのような中でも吉田松陰は猛烈に読書を行い、牢獄にいた１年２か月の間になんと 618 冊もの本を読破しました。その一方で、金子重野祐という亡くなったお弟子さんのために自分の食費を削り、その費用でお墓にお供えするものを送っていたといいます。牢獄に入ってなお勉強を続け、亡くなった人のために自分の食費を切り詰めるという松陰の姿に、他の囚人たちは驚きの目を見張り、その驚きはやがて松陰に対する尊敬の気持ちに変わっていきました。そして、いつ牢獄から出られるか分からないという、人生に絶望した囚人たちが、松陰の「勉強しましょう」という呼びかけに応えて、松陰を囲んで勉強会を行うようになりました。

松陰は、孟子という中国の古典を、当時の様々な問題や出来事と関連づけながら講義を始めました。すると、これによって牢獄の雰囲気が一変します。囚人たちが生きる力を取り戻したのです。囚人の中には、松陰を先生と呼んで尊敬する人がいました。この変化に牢獄の番人たちが驚き、ついには番人たちもその勉強会に参加して弟子入りをするようになっていきました。牢獄が、わずか半年でお互いに学び合う自己向上の場へと変身し、そこに捕らえられていた囚人たちは松陰を慕ってことごとく改心したということです。驚いたことに、その時松陰は 25 歳でした。囚人の中では、一番年の若い人でした。「宝島」を書いて有名なイギリスの作家スチーブンソンは、吉田松陰のことを人類至上最も高潔な人物であると評価しています。どんなに苦しい境遇にあろうとも、人や国を憂えることを忘れなかった気高い気持ちを持っている人だったということです。それだけ大きな良い意味での感化を、人に与えることができたということだと思います。松陰の「孟子」の講義はやがて「講孟余話」という書物にまとめられました。和泉市夏油という非常に有名な明治時代の先生が、この「講孟余話」という本を、古今和漢を通じて第一の孟子についての論文と絶賛しています。

牢獄に入れられているのに勉強などしても無駄ではないかという人がいるかもしれませんが、松陰が目指した勉強は、受験勉強とか就職とか出世に役立つ勉強ではなく、人は自分自身の中に尊いものがあるということを認める必要があるということです。彼が目指したものは、自分の中の尊いものを認めて理想的な人間になるための勉強だったのです。

松陰はその後塾を開いて、身分にかかわりなく勉強に意欲のある人に学問を教えました。松陰はこの塾で学問を教えたのはわずか 1 年ほどでしたが、月謝は無料でした。小さな塾で、塾生の半数は家が貧しく、身分の低い家の子供たちでした。彼らは貧しい生活の中から暇を見つけては塾に通い、高い志つまり理想を持って、そこで学んだことを子供たちに伝えました。その中から、高杉晋作や総理大臣となった伊藤博文、日本陸軍創設者の山縣有朋内務大臣を務めた品川弥二郎、陸軍中将になった山田顕義など国の中心になって働く人々を生み出していったのです。高杉晋作を除けば、足軽程度の下級藩士の子弟でしたが、これだけ短期間でこれだけ小規模の学校でこれだけの人材がそろったのは、歴史始まって以来のことだと言われています。本日は、このようなことを渡辺毅さんが書かれた道徳の教科書(PHP 研究所)からご紹介させて頂きました。

ただ生きているだけでも大変です。しかし、ただ生きるだけというのは犬や馬にもできますが、よりよく生きようと考えて努力できるのは人間だけです。人間の尊厳というのは本来そうした営みのうちに宿ると思いますので、よく生きるためにはどのような努力をしたらよいかを考え、そのよい手だてとして歴史から学ぶという方法もお考え頂きたく思います。